

# 防災おおがわら

## 内容

- 地震が来る前に身の回りの安全確認
  - 住宅用火災警報器設置は義務です
  - これからの「まちの防災」を考える **3**
- 自主防災組織の活性化を目指して

## 地震が来る前に身の回りの安全確認を



東日本大震災で倒壊したブロック塀。もし人が歩いていたら

東日本大震災発生から3年、宮城県沖地震からは36年が経過しましたが、いつまた大きな地震が起こるか分かりません。自宅や周辺の整理点検を日頃から心がけよう。

- 滑りやすい家具やピアノの脚には滑り止めを付ける。
- 子どもやお年寄りがいる場所や寝室には、できるだけ家具などを置かない。
- ② 落下物の整理点検
  - 重い物は、家具の上など高いところに置かない。
  - 照明器具、絵画、額縁などには、落下防止器具を取り付ける。
  - 観音開き戸には止め金を付ける。
  - 食器棚など、ガラス戸にはガラス飛散防止フィルムを張る。
- ③ 安全、迅速な避難のために
  - 廊下や玄関には物を置かないで広く開けておく。
  - ④ 家のまわり
    - プロパンガスのボンベなど、倒れやすいものは鎖でしっかりと固定する。
    - ブロック塀や門柱などには倒壊防止の安全対策を施すか、生け垣にする。

就寝中に火災に遭遇することで発見が遅れ、逃げ遅れることが原因で犠牲者が発生するケースが増加の一途をたどっています。そのため、住宅用火災警報器の設置が法律で義務付けられています。

警報器には大きく分けて2種類の感知方式があります。

- 煙式（寝室や階段への設置が望ましい）煙が火災警報器に入ると音や音声で知らせます。
- 熱式（台所や居室への設置が望ましい）火災警報器の周囲の温度が一定の温度に達すると音や音声で知らせます。

それぞれの警報器の特性を考えて設置しましょう。



**住宅用火災警報器設置は法律で義務化されています**

**高齢者世帯への火災警報器無料設置**

町では、70歳以上の高齢者のみで構成される世帯に対し、住宅用火災警報器の無料設置を行っています。

設置を希望されるかたは、お住まいの地区の町婦人防火クラブ員や町消防団員、区長または町総務課に申請してください。対象は、次の①②の両方に該当するかたです。

- ①町内に住所があり、町内の住宅に居住しているかた
- ②構成する全員が70歳以上の世帯（申請日現在）

※警報器の設置は、町婦人防火クラブと町消防団が行います。

町総務課消防防災係  
☎53・2111

## これからの「まちの防災」を考える 3 自主防災組織の活性化を目指して

住民同士の助け合いによる防災組織（自主防災組織）は、町内では現在38の行政区で結成されています。しかし、活動の長期化に伴うマンネリ化や参加者不足も心配される一方で、各組織では対策に頭を悩ませています。どうすれば区民に防災への関心を持ってもらえるか…。6月1日に行われた幸町区の防災訓練での取り組みを、区長の遠藤義春さんに聞きました。



訓練開始時、防災備品の整備状況を参加者にメガホンで説明する遠藤区長

1. 参加したくなる!? 訓練

幸町区では、平成18年に自主防災組織を結成以来、避難訓練や防災マップづくり、防災勉強会開催などさまざまな活動を展開してきましたが、参加者が毎回数人から十数人と少ないのが悩みでした。

そこで、多くのかたに関心を持ってもらうため、今回はレクリエーション要素として昔ながらの羽釜を使った「炊き出し訓練」を行うことにしました。また、「町内一斉清掃の日」なら区民同士が朝か

### 2. 全員が体験できるように

訓練当日は朝から快晴で気温も上がり、熱中症が心配されるほどでしたが、集合場所の幸中島集会所には予想を大きく超えて100人近くが集まり、遠藤区長ほか実行委員の皆さんを驚かせました。

この日の訓練は、まず集会

所に集合して人員を確認し、防災倉庫のさまざまな備品を確認することから始まりました。灯光器や非常用発電機など、普段あまり見ることのないものだけに、興味津々のかたも多いようでした。

続いて中島公園に移動し、大河原消防署員の指導の下、消火器による初期消火訓練や骨折時の対応、負傷者搬送などの応急手当訓練が行われました。これらの訓練は、特に高齢者の体調に注意しながら手早く行われたので、多くの参加者が体験できました。

また、炊き出し訓練では、電気が使えない事態を想定し

て、使用済みの木材を燃料として使いました。かまどから上がる煙と羽釜から漂うご飯の匂いは、会場のそれまでの張りつめた雰囲気をかき消してくれました。

その後、炊き上がったご飯はおにぎりにして参加者全員でおいしくいただきました。

炊事に参加したかたは、「大震災の時は、ご飯も作れませんでした。地区にこういう炊事の用意があれば、いざというときにとても心強いです。あとはいつでも使えるように訓練しておかなければ」と改めて訓練の大切さを学んだようでした。

3. 今後も防災意識の維持を

訓練終了後、遠藤区長は、「震災後3年たつて記憶の風化が心配されます。また、せっかくの防災備品も、使いこなせなかつたら意味がないので今回の企画となりました。区民の皆さんにこれからも防災に関心を持ち続けてもらうよう、さまざまな企画を検討し、区民みんなで防災に務めていきたいと思えます」とこれからの防災活動の方針を語ってくれました。



上:担架がないときは毛布を代わりに(負傷者搬送訓練)  
下:電気やガスがなくても炊飯OK(羽釜)



暑さのなか、炊き立てのご飯は熱くて握るのも大変